

焼打ちの思い出

酒井溫

たつみ第六号の木畑さんの米騒動
余談を見て、五十年前の本店の焼打
ち状況を間近に見た記憶がまざまざ
と生々しく目の辺りに甦って来たの
で、一寸したお役目も勤めましたの
で此の機会に記録に止めさせて頂き
度いと思い、書くことに致しまし
た。

月十二日の夕方、暗くなつて間もな
い頃、神戸の山手の熊内の電車通り
の角にあつた、いろは湯と云う銭湯
を出て手拭を下げて熊内台地の宅に
帰える長い坂道をぶらぶら登つて行
くと、火事だと云うので、急ぎ足で
坂道を登り布引側の高台から火事の
方向を見ると、南の方角で三階建て
と思われる高い家が燃え上つている
のを見て、本店ではないかと直感し
たので、近くの依岡専務の宅へ知ら
せ、同じ近くの松田技師長の宅へ飛
び込んで知らせた処、松田さんから
君は本店へ急いで行つて確め脇浜へ
連絡せよ、僕は今から工場へ行く、

深夜三時間の強行軍で使命を果した吾々一同は、須磨の海岸で海水につかり脇浜へ引上げた次第であるが、米騒動に因る焼打ち騒ぎも十四日出動の、姫路師団の剣付あご紐の兵隊さんの御蔭で沈静し、治安維持の有難味を痛感した次第であった。

英・独より二つの製糖プラントを輸入し、台灣の鈴木直系の北港製糖会社の北港と月眉に建設の為、迂濶さんに従つて渡台し六年間、製糖に従事し、その後二社を合併し五工場を持つ東洋製糖会社と改称されたのであるが、私は大正五年に神鋼へ転勤致し、海外諸国の製糖工場を見学し、戦後二十八年には中華民国となつた台灣の糖業公司の各工場を歴訪したのですが、稿を改め度いと思つて居ります。

これがためか農商務省は、鈴木商店の意見を一応聞いて其の年の作柄予想を発表して居つたと耳にしました。当時の米価は昨今想像も出来ぬ程の安値であつて、農民の生活を脅す状態であったので、価格調整の意途の

松下さんの米のすぐれた鑑識に就いてその一例を申しますと、買付けた数千俵の中から数種の米をボテに入れて、その生産地を尋ねますと、これは何国の産、これは何国の産と、一々図星を指すことは全くのお米の

岡山精米所時代と 米騒動の想い出

(遺稿) 土居英成

は、大正五年の春でした。この精米所は、一昼夜に精米二百五十俵即ち百石を精白にする能力を持っていて、一ヶ月に三千石の買付けをするには随分と苦労をしたものでした。

抜きの人が、米の鑑識に掛けては名人と、人も許した松下豊吉という年配の方が精米所へ来られましてから、全国の米の出来ばえを一々詳く実地に視察して廻つて、必ず各停列車に乗り、乗客中の農民とも話して、ここに只庫米問屋生

内 容 随想、詩、和歌、俳句、繪
写 真等

太陽鉱工KK分
たつみ編集部宛

よりも、より正確のようでした。それがためか農商務省は、鈴木商店の意見を一応聞いて其の年の作柄予想を発表して居ったと耳にしました。当時の米価は昨今想像も出来ぬ程の安値であって、農民の生活を脅す状態であったので、価格調整の意途の話

松下さんの米のすぐれた鑑識に就いてその一例を申しますと、買付けた数千俵の中から数種の米をボテに入れて、その生産地を尋ねますと、これは何国の産、これは何国の産と

伝に乗った群衆は、遂に川崎町一丁目の本店に押し寄せて来て焼打ちをしたのでした。前の神戸新聞もその時、焼かれました。幸いなことには鈴木商店は営業が終つたら毎晩帳簿を全部、幼年店員（ボンサン）が胸

と云う指図を受けたので、今の様なタクシーなどは無く、電車も動かなければならぬので、熊内から栄町通り六丁目角にあつた神戸新聞社まで息を切らして走せ付けた時は、電車通りの曲り角の向い側の三階建ての大きな木造家の本店は既に無惨にも燃え盛つていて、凄まじく恐怖の巷と化していくので息詰る様なショックを受け、呆然自失した次第であつた。之に対して数百と思われる異様な風体の屈強な暴徒が歎声をあげて本店を取り囲み、電車通りの中央に薪を積み上げ、近くの油屋から取つて来た石油をぶちかけ松明とし、之を暴徒がてんでに持つて本店内へ走り込み、噴怒の形相で撒き散らすと云う全く目も当てられぬ表現に苦しむ淒惨な暴状であつた。之に対し消防士は袋叩きされ、筒先を暴徒に向けても多勢にかなわず、一方警官隊も問題にならず騎馬巡査も馬から引づり降される有様で、全く無警察の状態で、他国のように

お指図を思い出し、急ぎ脇浜へ知ら
せねばならぬが、何様各所の米屋や
質屋が焼打ちされ数ヶ所に火の手が
上って居り、治安が悪く、反鈴木の
一般市民の私語が過敏に耳に入るの
で恐怖心に襲われ不安で電話もかけ
られず、電車も止っているので三ノ宮
辺りまで走り、人力車を見付けた
ので神鋼まで急いで呉れと車に乗つ
た処、幾らでも成丈け沢山先に車賃
を呉れと云われ不気味と不安の思い
で走らしたのであった。漸く神鋼へ
ついて見ると既に灯下管制をして真
っ黒な中で重要書類を、丁度休止し
ていた製鋼用の平炉の中に運び、不
安な暗黒の中で沈黙の待機の状態に
あつた。その時、外の方から投石が
あつたので、待機の一団はスワップと
ばかり立上つたが、悪質な徒と判つ
たので黑暗の笑声となつた。併し臆
病風を生身にサッと感じた思いであ
つた。投石恐怖の後に大手の本邸が
焼打ち中であるとの情報があつて応
援は間に合わないが、お見舞に急行

に脇浜を出発し、坂を登つて上筒井通りに出で、山手の市電のレール伝いに中山手通りより兵庫を経て大手に向つたのであるが、神戸市内は真っ黒の中に荒れ狂う暴徒の襲撃を受け、焼打ちされた家の余炎が数ヶ所あり、市中は薄意味悪く静かなれど、家人は黑暗の戸外に出て私語して居るのが耳に入り、吾々一行を暴徒の一味と見てゐるらしく聞える反面に、本物の暴徒に遭遇することを恐れ、警戒しながら漸く朝の四時に大手の本邸の門前に安着したのであるが、驚いたことに焼打ち処ではなく、門内は深閑として人の気配もなき、不審に思い門内を覗いて見るが、広大な庭の芝生一面に薄黑暗の中に沢山の人が寝転んでいるのが見えたので、神鋼から御見舞に参りましたと大声で伝えると、総立ちになり門を開かれたので御挨拶をしたのであるが、薄黑暗の中の吾々の風体を門内より覗き見られ、最初は警戒して開門しなかつたとの事であつた

神様のような肌の人でした。

鈴木商店、倉敷では根岸商店でした
が、地元の三備地方の買付けは随分

思い切って買付けしたものでした。船は旭川川口の三幡の河口屋が帆船を周旋して、米所の麻袋入りの精米をどんどん神戸へ送ったものでした。その当時、所員の特別の贅沢としましたことは、この沢山の米俵の中から松下さんがサスを入れて一番にご飯焚いて、おいしいものを驰走してくれたことでした。

そこで、この鈴木の活躍振りに対して商売敵から誤解を受け、米一升が十三錢にも上ったことは、之は畢竟鈴木商店が米の商売をするからであると、北陸地方の漁師のお神さる達が八釜しゆう云い出して、所謂米騒動が起りました。また之を大きよに伝える新聞があつて世間をおおつたものですから、余勢は忽ち神戸に飛び来たりまして遂に大正七年八月十二日夕方頃、空虚の宣

伝に乗った群衆は、遂に川崎町一丁目の本店に押し寄せて来て焼打ちをしたのでした。前の神戸新聞もその時、焼かれました。幸いなことに鈴木商店は営業が終つたら毎晩帳簿を全部、幼年店員（ボンサン）が胸

革命運動も斯やと、初めて平素の治安の有難味が身に浸みた次第であつた。眼前に間近く本店の燃え盛るのを見て呆然として居ると、次は脇町の神戸製鋼所の焼打ちだと云う流言

する事になり、代表者を抽籤の結果、お使者に貧弱な私が当つたので早速、柔道や剣道の心得のある屈強の若者五人を同行することとし、途

貴下月俸
知申上候也
大清光緒二年正月一日
四三決定工付御
木商店人書
金木
龍治郎
木烟

大正八年の月給の辞令

れて居る。その月給が一年たたぬ内に五円となり、二割の戦時手当（店員以上は五割）が

あつた。五年越しの歐州大戦も十一月には終結し、さしもの独乙も遂にコンビエニーユの森に万哭の怨を呑む事になるのだが、米騒動の勃発したのも此の年の事である。脇道にそれるが一寸、大正初期の国状に想をめぐらせて見度い。

月俸四円ニ決定ニ付キ御通知申上候
月存して居る。その中の一つ「貴下
私の手許に今なつかしい物を数種
人事係」。月給の辞令
也。合名会社鈴木商店
である。厚手の洋紙に
小豆色で線を書し、氏
名と必要な箇所に實に
立派な肉筆で書き込ま
れて居る。その月給が
一年たたぬ内に五円と
なり、二割の戦時手当
(店員以上は五割)が

一角に暴発した銃声は瞬時にて歐州を硝煙の巷と化し、全世界平和の夢を震撼した。我が日本も日英同盟のよしみから連合国側に名を連ね、参戦する事となる。宣戦の大詔が発されるや、陸軍中将神尾光臣は総督ワルデック大佐の死守する膠洲湾青島要塞を一気に席巻し、制海権を奪取して戦捷を恣にした。これと呼応して、我が財界、産業界も鳳翼を羽ばたかせ、荒廃した欧州は絶好の消費市場として急速に我が国力に進展を齎した。世に言う第一次大戦景氣である。この時代に於ける鈴木商店の躍進については敢えて贅言の要はない。話を本筋に戻す事にする。

付き、賞与は年四回支給されたのだが、から、坊さん風情の我々にも笑いの止まぬ待遇であった。その内、用いも掛けぬ八月には例の本店焼打ち事件が勃発、あまつさえ世上の批判に晒される様な悲運に直面した。「鈴木商店炎上」再びあの端麗な建家に相見える事はなくなった。僅に玄関脇の大金庫のみが厳然として猛火に耐え残り、他の殆んどが為有に爆発した。けれどもこうした一連の出来事は却て我々全鈴木の憤激と斗志をかき立てる結果となり、総蹶起の気概は天に冲するものがあった。直ちに焼跡は整地されて昼夜兼行十二日間の超スピードで、スレート葺平家の建ながら本店営業所が竣工、神戸市民をアツと言わせた。工事部吉本鉄三郎博士、土屋新兵衛さんの見事な離れ業である。バラック建の急造とせ「ヨネマーク」を浮き彫りに押出し離れた後も長く神戸郵便局が使用、昭和終戦の前迄存続して、私等辰巳会員の鄉愁をそそったものである。とは言うものの三層の甍を仰いで出退した昨日に位べ、今は中央丸

下を挟んで左右の大広間にしばらく
雑居の不自由をしのばねばならん事
になつた。それに従つて思い出され
るのは愉快な食堂風景である。勿論
スペースを縮少されて居るので苦肉の
策として立食式になつた。大変能
率的で簡潔なのが歓迎されて却つて
効果はよかつた様であつた。偶々、
米価の高騰と品不足の為、今で云う
代用食として週二回お昼にうどん食
を支給されたが何杯でも喰べ放題と
言うのが若い間に人気が出て、大食
競べのレコードが出る等、朗かな話
題が渦巻いた。その頃、食堂の板壁
に大きな張り紙が出された。某日、
神戸岩屋の浜で実業団のボートレー
スが開催されるので、我が鈴木商店
も之に参加、オール本店の支援を希
うと言つてある。曰く「檄!!!摩耶
山麓風運転た急にして、敏馬海上、
殺氣天に漲る、満を持して機到るを
俟つ 我が辰の健児は……云々」 大
層な書き出しで度肝を抜かれたが、
一代の名文として今でも印象に残
る。舵手、整調、二番、と選手の名
も列記されてあつたが、誠義さんの
御子息日野俊夫さん、大坪さん、鹿
田さんの名のあつたのを憶えて居
る。当時は船舶部の腰押しでラン
チ、サンパン総出の応援を繰り出し

ことでした。元町などの店頭のガラスなどは、野球のバットや棒切れなどでメチャヤメチャに破つて歩くとう暴動さがありました。それで暴動は何時また焼残りの本店の倉庫等で襲つて来るかも判らんというので、この後の数日間は、万一に備えて、町の顔役を数人頼んで、之に警察署しを得てドス（日本刀）を公と、めいめいに差させて倉庫の附近

「鈴の木」の若木は、見る見る垣
を張り枝を伸ばして梢は天を摩す
かりとなつた。「三ツ木」や「菱の
木」を睥睨して天下に霸を称えんと
した。しかし喬木には
は強い。或る日はげし
い嵐は迅雷を巻き起して「鈴の巨木」に襲
かかつた。巨木はあくまでも地響を立てて倒
潰した。そして悲風秋月となり

（一）
大正七年三月の或る日、私は「
十周年を聴いて。長谷川幸延）

霜幾春秋。親株の根から芽を出し
側木や孫木は、今や親木をしのぐ
さとなつた。幾百本もの森のコン
エルンは、今はもう朽ちて面影の
い「鈴の木」の根株をじっと見守
つつ、幻の親木の立姿を仰いで
る。何時迄も何時迄も。

（1967・3月、鈴木商店解散
十周年を聴いて。長谷川幸延）

（二）
木 畑 龍治郎

（三）

なつた。初めての朝、北野の済美館から引率されて本店の表玄関に立た時、私は思わずその偉容にたじこいだ。のしかかる様な重圧感にからかは血のふるえを感じた。中世纪的な洋館建に和式を加味した寄せ棟壁風造り三層の建物は、前年迄「ミードホテル」として令名を高めて来ただけに、外観は更なり、内部の設備調度等目を見張るばかりだった。四十に余る各事業部は個室に割拠して一業一派を形成し、さながら群雄覇を競うが如き壯觀を呈して、将鈴木天国の名に恥じぬ秩序と風格を誇示して居た。此處から若い鈴木商店の青春と情熱が沸騰して雲をそび、風を起して行くのである。

東川崎町から
海岸通り十番地へ

木 煙 龍 治 郎

も事務終了後でしたから全部、帳簿は倉庫へ始末してありましたから、豪壯なる元のミカド・ホテルの三階建の鈴木商店の事務所は一瞬にして灰燼に帰しましたが、営業用の帳簿は安全であったが為に直ちに商売は支障なくはじめられるということは不幸中の幸いであります。この焼打ち騒動の為には姫路から軍隊を出動してこちら台下にして、まつ

つ
日 準 城 階 薄 て と の も 安
切捨てご免だと、其の内心の得意も思ふべしでありました。鈴木のお家
さんははじめご主人達、金子さん、柳田さん、西川さん達は、然るべく難
を避けられて居られていました様でした。
した。
元来、鈴木商店は日本の商業繁盛の為に欧州へ精米の輸出をもし、また國民のために政府の依頼を受けていた。

遂にあの様な騒動が起ることとなりました。誠に世の誤解といふもの恐いものです。之に対しは鈴木商店の名に依つて、永井さんの執筆による鈴木商店の米の商売に関する鉛筆画を発表され、世間の誤解をとかれることで、だ感概無量なるものがあります。

戸市東川崎町一丁目一番地辰合会社鈴木商店」の部厚い封書を受取った。私の採用通知と一連の関係書類である。その封筒の裏に印刷された三十余の電話番号と電信略号「一、ウベ・カネタツ」とあるのが、私が初めて知った本店の商号であった。大仰に言えば私の半生の運命を決づけた一瞬であったかも知れない。大いなる未知への希望と不安を抱いて、同じ採用の三十人余りと見習にして三台一の本店に勤務する事